

# ロンゲスト・ヤード

2006(平成18)年5月6日鑑賞(ホクテンザ1)

★★★



監督＝ピーター・シーガル／出演＝アダム・サンドラー／クリス・ロック／ジェームズ・クロムウェル／バート・レイノルズ／ネリー／ボブ・サップ (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2005年アメリカ映画／114分)

## 第2章

面白くてタメになる

……八百長疑惑で追われた元NFLのトップ・プレイヤーが刑務所の中へ。ここから始まった「看守チーム」VS「囚人チーム」によるアメリカンフットボールの試合はガチンコ対決。しかし、その試合で囚人チームは勝つことが許されないものだった……。そこで彼は再び八百長を？ いや、それは人間の尊厳が許さないはず。さて、彼の取るべき途は……。個性豊かな(?)囚人チームの面々が持ち前のパワーを炸裂させたスポーツ・アクション・エンタテインメントを、少しだけ理屈づけをしながら(?)、タップリと楽しもう！

## 主人公は元NFLのトップ・プレイヤー

この映画の主人公は、元NFLのトップ・プレイヤーのポール・クルー (アダム・サンドラー)。スピード違反、飲酒運転で彼の車を取り締まった警察官が、顔を見ただけですぐに彼とわかるほどだから、ポールはかなりの有名選手だったはず。ところが、今ポールが「有名」なのは、八百長疑惑によってNFLから追放されたというニュースによってだから、彼にはつらいものが……。彼が恋人の車を借りて無謀運転していたのも、半分ヤケになって自堕落な生活を送っていることの延長線……。

そこで「ゴメンナサイ」と謝ればいいものを、ポールは警察官を挑発するかのよう、パトカーに一撃をくらわせたうえで逃走。そこから始まったカーチェイスは何とテレビで実況中継されることに……。そんな国民注視の中、突然急停車

させたポールの車にパトカーが次々と激突。これでは、アメリカではもとより、日本でもポールの実刑は免れないところ……。

## 八百長はどの世界でも……？

ポールがホントに八百長をしたのかどうか？ それはこの映画の中ではずっと闇の中におかれ、ラスト近くのある重要な場面になって、やっと本人の「告白」が登場するが、さてその真相は……？

八百長は大相撲をはじめ(?)、いろいろなスポーツの世界に存在しているはずだが、それはすべて程度問題……？ したがって真相はヤブの中となるものが多い。

八百長をめぐる日本最大の「球界の黒い霧事件」は、昭和45年の西鉄の益田投手、与田投手、池永投手らに対する永久追放処分事件。これにはさまざまな紆余曲折があったが、池永投手については根強い「冤罪論」があり、ファンによる根強い救済運動の結果、ついに2005年4月25日、永久追放処分が35年ぶりに解除されたことは記憶に新しいところ……。

## 伝説の作品のリメイク版だが……？

この『ロンゲスト・ヤード』は1974年に世界中を熱狂させた名作のリメイク版とのこと。74年版でポールを演じたのは、05年版では往年の名プレイヤーで囚人チームのコーチとなるネイト・スカボローを演じたバート・レイノルズとのこと。1974年当時、スポーツ・アクション・エンタテインメントという範疇の映画があったのかどうか知らないが、今やその手の映画はテンコ盛り……。そのうえ、間の悪いことに(?)、つい先日は、サッカーファン待望の映画『GOAL!』三部作の第1作(05年)が公開されたところ。

アメリカではアメリカンフットボールは一貫して根強い人気を保っているのだろうが、日本ではサッカーに比べれば、その浸透度はケタ違いに低いはず。したがって、いくら伝説の名作のリメイク版で、「全米興収1億5千万ドル突破」といっても、日本ではそうはいかないのでは……？ その証拠に日本では、この映画を上映するのはホクテンザ1館のみ……。

## 嫌味タップリの刑務所長は……？

この映画の舞台となる刑務所は、テキサス州の連邦刑務所とのこと。日本と違い（？）、アメリカでは砂漠のような「僻地」に刑務所を設置していることがよくわかる。したがって（？）、こんな刑務所内では刑務所長がすべての権限を独占しているらしく、州知事への立候補まで考えているというヘイズン（ジェームズ・クロムウェル）は、自ら「ここでは私が裁判官であると同時に刑の執行人である」と宣言しているほど。つまり、刑務所内では、どんな「事件」でもデッチあげることができるうえ、所長のさじ加減1つで刑期を延長したり減縮したりすることができるらしい……？

そんなヘイズンが考えたのは、既にセミプロ級となっているアメリカンフットボールの看守チームに、本戦での自信を持たせるため、当て馬として囚人チームを「対決」させること。そのために格好の人材（？）が刑務所内に転がり込んできたのだから、ヘイズンとしてはそれを活用しない手はない……。そこで、早速ヘイズンはポールに対して囚人チームの結成とそのQB兼コーチをつとめることを命じたが……？

## これも嫌味な看守長は？

刑務所に入ってきたばかりのポールに対して、看守長のクノールをはじめ看守たちが「いじめ」を働くのは、あの八百長事件によって損をさせられたため……？ 逆にヘイズンが機嫌よくポールに対して囚人チームの結成を命じたのは、ヘイズンはポールによって大儲けさせてもらったから……？ 刑務所に入ってまで、八百長事件に引きずられるポールも大変だが、この看守長のクノールは刑務所内の実権をヘイズンから奪い取ろうとしていたため、ポールに対してヘイズンの命令を受けても、囚人チーム結成に動くことを「断れ」と「厳命」した……。しかし、そんなことを言われても、ヘイズンとクノールの間に立たされて困るのはポール。あれやこれやのいきさつを経て、結局ポールは囚人チーム結成に動くことになったが……？

## 刑務所内は個性派の集まり……？

この映画の面白さは、何とんでも囚人チームに集まったプレイヤー（？）たちの個性の豊かさ。というより、よくまあこれだけのハンパ者を集めたものだと感心……？ その詳細は映画を観て楽しんでもらいたいものだが、①俊足のメグット（ネリー）、②怪力ながら泣き虫のスウィトウスキ（ボブ・サップ）、③死刑判決3回の間離れした大巨人など、ポールの「リクルート」活動によって次々と集まってくる個性派囚人たちのキャラをたっぷりと楽しもう。もっとも、彼らが囚人チームに入ったのは、決してポールのリクルート活動におけるプレゼンテーションを信用したからではない。むしろ八百長の前科を持つポールの言葉はハナから信用されていなかった。彼らの狙いはただ1つ。試合に出れば、合法的にあのにつきき看守たちを叩きのめすことができること。そんな個性派ぞろいの囚人チームをまとめるポールはチョー大変……。

## 良きリーダーには必ず良き参謀が……

大将1人だけでいい仕事ができないことは、どの世界でも同じ。小泉総理が5年間無事に小泉改革を推進することができたのは、初期においては田中真紀子外務大臣の応援が、そして5年間にわたって一貫して小泉総理政権を支えてきた竹中平蔵大臣など多くの「参謀」の存在があったおかげ。この映画でポールを支える名参謀＝マネージャーになるのは便利屋のケアテイカー（クリス・ロック）。黒人は黒人同士……？ このケアテイカーのおかげで、黒人チームの精鋭が結集できたようなもの。ところが、メキメキと囚人チームの実力が備わってきていることに危機感を持った看守チームの策謀によって、ケアテイカーはポールの身代わりになるかのように非業の死を……。これによって大きなショックを受けたポールと囚人チームの怒りは最高潮に……。

## スポーツ・アクション・エンタテインメントのクライマックスは？

5月3日に観たケシロフスキ監督の『ふたりのペロニカ』（91年）はすばらしい映画だったが、その解釈が難解なだけに、評論を書くのに大いに苦労したも

の。しかし、『GOAL!』にしても、この『ロンゲスト・ヤード』にしても、この手のスポーツ・アクション・エンタテインメント映画は、ラストに設定されているクライマックスシーンの結末がわかっている(?)だけに、頭を悩ませることなく楽しむことができる。もともと囚人チームは看守チームの「自信づけ」のために結成され、対戦させられたものだから、いくらマスコミ報道が入ったとしても、決して試合に勝つことは許されないものだった。もし所長命令に違反して試合に勝ったりしたら……?

ハイズンがポールを「活用」したのも、ポールが優れたQBであるとともに、八百長の前科持ちだから……? 現に試合中、ポールはかなり八百長めいた行動をとったため、囚人チームは仲間割れ寸前までいったが、それもこれもクライマックスを盛り上げるため……? さあ、最後のタッチダウンは……?

2006(平成18)年5月8日記

ミニコラム

## W杯とジーコ批判を考える

06年8月9日、オシム監督就任後初の新生日本代表は見事2-0で勝利した。するとたちまちマスコミは、オシム流を「考えて走る」「隙あらばシュートを打つ」と分析し、選手たちへのオシムサッカーの理解と浸透を絶賛した。しかし本当にそうだろうか?

『ロンゲスト・ヤード』を観ても、試合における監督の采配がいかに重要かは明らかだが、それは個々の選手が相応の実力を持っていることが大前提だ。W杯ドイツ大会にジーコジャパンを送り込んだ日本では、キャスターや解説者がごぞって日本の3戦勝利、予選突破を予言した。また、にわかファンを含めた日本中の熱狂ぶりはご記憶

のとおり。ところが結果は何と予選敗退だ。

6月24日付毎日新聞の「こんなにも弱かったとは」が最も説得力ある社説だろう。真の実力を省みず、勝つぞ勝つぞとマスコミが国民を煽りたてる姿は、まさにあの「先の大戦」と同じではないか。そしてジーコ「解任」もA級戦犯に責任をおっかぶせた構図と同じ。かつての阪神タイガースのような監督のすげ替え劇でお茶を濁すことなく、選手の真の実力を見極めることこそがマスコミや識者の責任だと思うのだが……。

2006(平成18)年8月16日記